

〈新刊紹介〉

庵功雄・杉村泰・建石始・中俣尚己・劉志偉編

『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』

本書は、張麟声氏の還暦を記念し、指導を受けた研究者によって編まれた論文集である。張氏は2005年から「中国語話者のための日本語教育研究会」を立ち上げ、母語の違いを踏まえた日本語教育文法を研究する。そうした理論的モデルのケーススタディを集めた書である。

本書の構成は、「まえがき」, 「学習者コーパスを用いた誤用観察の一試案——格助詞「に」を例に——(庵功雄)」, 「二格名詞句に関する一考察——日中対照研究の見地から——(劉志偉)」, 「日中対照に基づく中国人日本語学習者の現場指示の選択(杉村泰)」, 「作文データに見る中国人日本語学習者における日本語の非現場指示の習得(陳曦・張芮溪)」, 「コーパスを用いた「～たばかりだ」と「剛」「剛剛」の日中対照研究——共起する動詞、後続する表現に注目して——(建石始・陳臻滄)」, 「程度を表す副詞の日中対照と日本語学習者コーパスの分析——話し言葉と書き言葉の違いに注目して——(陳建明・中俣尚己)」。

末尾に、「張先生との思い出——あとがきにかえて——(劉志偉)」, 「張麟声教授 略歴および主な業績」, 「執筆者紹介」を付す。

(2017年11月15日発行 日中言語文化出版社刊 A5判横組み 146頁 2,000円+税 ISBN 978-4-905013-92-1)

有田節子編

『日本語条件文の諸相——地理的変異と歴史の変遷——』

本書は、「認識的条件文」に焦点をあて日本語条件表現の諸相を捉えることを目的に編まれた論文集である。2013年度日本語文法学会におけるパネルセッション「認識的条件文の地理的変異と歴史的变化」を契機に論文集が企画され、2015年1月のシンポジウム「日本語条件文の諸相——地理的変異と歴史の変遷——」(於文京シビックホール)を経て刊行された。

本書の構成は次のとおりである。第1部の現代日本語共通語・理論編には、「第1章 日本語の条件文分類と認識的条件文の位置づけ(有田節子)」, 「第2章 準体形式・断定辞の機能と条件文(江口正)」, 「第3章 条件接続形式「くらいなら」と認識的条件文(前田直子)」。第2部の中央語の歴史編には、「第4章 古典日本語における認識的条件文(鈴木泰)」, 「第5章 中央語におけるナラバ節の用法変化(矢島正浩)」, 「第6章 「のなら」の成立——条件節における準体助詞——(青木博史)」。第3部の地理的変異編には、「第7章

認識的条件文の地理的変異の類型（日高水穂）, 「第8章 九州・四国方言の認識的条件文——認識的条件文の分化の背景に関する一考察——（三井はるみ）, 「第9章 東北方言の認識的条件文（竹田晃子）」。

末尾に, 「事項索引」, 「形式索引」, 「執筆者紹介」を付す。

(2017年11月25日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 254頁 3,700円+税 ISBN 978-4-87424-746-4)

森山卓郎・三宅知宏編

『語彙論的統語論の新展開』

本書は, 仁田義雄氏の古希を記念し, 指導を受けた研究者によって編まれたものである。本書には, 仁田氏の日本語学会会長就任講演(2015年日本語学会秋季大会, 於山口大学)が基となる論考も寄稿されている。

本書の構成は, 「序（森山卓郎）」, 「包括的・明示的な文法記述を求めて——私の見果てぬ夢——（仁田義雄）」, 「「VN・VN」をめぐる——「展示, 即売」, 「展示即売」に対する「展示・即売」——（小林英樹）」, 「多寡を表す形容詞と存在動詞との相違——「多い」を中心に——（佐野由紀子）」, 「語彙的要素と文法的要素の組み合わせ方と主題マーカ―の相関関係——「言語の典型的特徴をとらえるための対照研究」の立場から——（張麟声）」, 「日本語の「は」と韓国語の「un/nun」との対応と非対応（鄭相哲）」, 「日中受動文の受影性——結果性と前景化——（塩入すみ）」, 「副詞+「の」による名詞修飾の諸相——書き言葉コーパス調査に基づいて——（野田春美）」, 「日本語動詞における「制御性（意図性）」をめぐる——語彙の意味構造と統語構造——（三宅知宏）」, 「意志性の諸相と「ておく」「てみる」（森山卓郎）」, 「「しようと思う／思っている」と「つもりだ」——書き言葉における使用実態から——（高梨信乃）」, 「関西方言の知識共有化要求表現の動態（日高水穂）」, 「逆接条件文「テモ文」の「モード」をめぐる（前田直子）」, 「トイッテ類の意味機能——接続詞「トイッテ」・「カトイッテ」・「ソウカトイッテ」を含む文の分析——（高橋美奈子）」, 「動詞の意味と引用節（阿部忍）」, 「評論的テキストにおけるダ体とデアル体の混用（安達太郎）」, 「日本語文法研究と国語における文法教育（山田敏弘）」, 「限定詞「この」と「その」の機能差再考——大規模コーパスを用いた検証——（庵功雄）」。

末尾に「あとがき（三宅知宏）」, 「参考文献」, 「執筆者一覧」を付す。

(2017年11月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 286頁 4,200円+税 ISBN 978-4-87424-748-8)

加藤重広・滝浦真人編

『日本語語用論フォーラム2』

本書は, 日本語運用・運用実態に関わる研究を発信する論文集であり, 2015年末に刊行された第1巻に続いて編まれたものである。

本書の構成は, 「『日本語語用論フォーラム』刊行にあたって」, 「まえがき」に続き, 「日本語副助詞の統語論的分析（加藤重広）」, 「比喩を導入する構文としての直喩の

語用論的機能 (小松原哲太)], 「「させていただく」という問題系——「文法化」と「新丁寧語化」の誕生—— (椎名美智)], 「談話構造の拡張と構文化について——近現代日本語の「事実」を中心に—— (柴崎礼士郎)], 「談話理解に伴う脳波の解析を通じたコソア機能区分の試み (時本真吾)], 「現実世界の対象を表わさないソの指示——歴史の変遷をとおして—— (藤本真理子)], 「丁寧体における疑いの文——複数のコーパスにおける「かね」「でしょうか」の現れ方—— (野田春美)], 「事例語用論 Exemplar Pragmatics の試み——利那が過去に取り込まれるとき—— (吉川正人)」となる。末尾に「あとがき」, 「執筆者紹介」を付す。

(2017年12月12日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 252頁 4,400円+税 ISBN 978-4-89476-878-9)

鈴木亮子・秦かおり・横森大輔編

横森大輔・東泉裕子・秦かおり・中山俊秀・鈴木亮子・兼安路子・片岡邦好・

岡本多香子・大野剛・遠藤智子・岩崎勝一著

『話しことばへのアプローチ——創発的・学際的談話研究への新たな挑戦——』

本書は、話しことばの文法構造と言語使用の分析をまとめた論文集である。著者らが発起人となって2011年に行われた「第1回話しことばの言語学ワークショップ」(於東京大学)をはじめとする研究会の成果が編まれている。

2部構成となっており、「はじめに」に続いて第1部は理論編として話しことばに基づく文法研究に関する概説と論文が、第2部では実践編として同じデータを異分野の研究者が分析した論文がまとめられている。第1部には「イントロダクション (大野剛・鈴木亮子)」、「文法システム再考——話しことばに基づく文法研究に向けて—— (大野剛・中山俊秀)」、「話しことばに見る言語変化 (鈴木亮子)」、「多重文法——「こと」の分析を通して—— (兼安路子・岩崎勝一)」。第2部には「イントロダクション (片岡邦好・秦かおり)」、「認識的スタンスの表示と相互行為プラクティス——「やっぱり」が付与された極性質問発話を中心に—— (横森大輔)」、「語りにおけるインタビュー어의自称詞使用——なぜ「おれ」は「パパ」になり「わたし」になったのか—— (岡本多香子)」、「創発的スキーマと相互行為的協奏について——「問い」と「相づち」による構造化を中心に—— (片岡邦好)」、「「みんな同じがみんないい」を解読する——ナラティブにみる不一致調整機能についての一考察—— (秦かおり)」。各論文にはそれぞれの著者によるコラムが付されている。末尾に「索引」, 「執筆者紹介」が付く。

(2017年12月14日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 268頁 2,700円+税 ISBN 978-4-89476-818-5)

小林芳規著

『平安時代の佛書に基づく漢文訓讀史の研究 第二冊——訓点の起源——』

本書は、日本の訓点の起源について、近年、朝鮮半島において発見された角筆で書かれた古文獻を、新羅の影響の観点から論じるものである。日本の訓点資料と訓点の起源を東アジアに存在する角筆文獻と相対化して捉える必要性を示す。

本書の構成は、「凡例」に続き、「第一章 緒説」,「第二章 奈良時代の角筆訓点から観た華嚴經の講説」,「第三章 日本の初期訓点と新羅經加點との関係」,「第四章 角筆加點の新羅華嚴經」,「第五章 日本語訓点表記としての白点・朱点の始原」,「第六章 勘經の訓読法——奈良時代の訓読——」,「第七章 日本所在の八・九世紀の華嚴經とその注釈書の加點本」,「第八章 平安初期の東大寺関係僧の所用仮名と新羅經の角筆仮名との関係」,「第九章 日本のヲコト点の起源と古代朝鮮語の点吐との関係」,「第十章 日本平安初期の訓読法と新羅華嚴經の訓読法との親近性」,「附章 宋版一切經に書入れられた中国の角筆点」,「本書の内容の基となった既発表論文等」。

(2017年12月15日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 352頁 13,000円+税 ISBN 978-4-7629-3592-3)

茗荷円著

『近代日本女性書簡文の表現史研究』

本書は、書簡文に焦点を当て、近代女性の表現特徴と表現史から近代女性の言語使用の実態の一端を明らかにしようとするものである。著者が2010年に聖心女子大学大学院文学研究科に提出した博士論文「近代日本女性書簡文の研究」をもとにまとめられた。

本書の構成は、「はしがき」,「序章」,「第一章 文末文体」,「第二章 頭語」,「第三章 結語」,「第四章 頭語と結語の対応」,「第五章 自称詞」,「第六章 対称詞」,「第七章 自称詞と対称詞の対応」,「第八章 署名と宛名・脇付け」,「第九章 署名と宛名と脇付けの関連性」,「第十章 各項目の変遷の相関関係」,「終章 結論——近代の女性書簡文の影響と役割」。末尾に、「付録 戦後の女性書簡文の位相性」,「参考文献一覧」,「資料一覧」,「あとがき」,「索引」を付す。

なお、平成29年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金・研究成果公開促進費)の交付(課題番号17HP5060)を受けている。

(2017年12月20日発行 おうふう刊 A5判縦組み 552頁 17,500円+税 ISBN 978-4-273-03785-7)

建石始著

『日本語の限定詞の機能』

本書は、現代日本語における名詞の指示と限定詞に関する研究であり、「特定／不特定」「定／不定」といった名詞の指示と不定を表わす限定詞について論じている。本書は「日本語・日本語習得研究博士論文シリーズ」企画の第1弾として刊行されたものであり、著者が2005年3月に神戸市外国語大学大学院外国語学研究科に提出した博士論文「日本語の限定詞の機能」がもととなっている。

本書の構成は、「まえがき」に続き、「第1章 序論」,「第2章 日本語の名詞句における特定性と定性」,「第3章 談話的機能の観点から見た後方照応」,「第4章 名詞の特定性と事態の現実性」,「第5章 連体詞「ある」の意味・機能」,「第6章 「一+助

数詞+の」の意味・機能」,「第7章 限定詞の階層性」,「第8章 結語」。末尾に「参考文献」,「例文出典」,「あとがき」を付す。

(2017年12月25日発行 日中言語文化出版社刊 A5判横組み 172頁 2,000円+税 ISBN 978-4-905013-95-2)

須賀あゆみ著

『相互行為における指示表現』

本書は、指示を相互行為の一環とみなし会話者間の指示対象の理解を記述する、著者のこれまでの研究を一書にまとめたものである。

本書の構成は、「まえがき」「トランスクリプトに用いる記号一覧」に続いて、「第1章 会話活動における指示」,「第2章 会話分析の手法による指示研究」,「第3章 指示対象の認識を確認するプラクティス」,「第4章 カテゴリーの知識を調べるプラクティス」,「第5章 言葉探しを伴う指示のプラクティス」,「第6章 聞き手が知らない対象の存在を知らせるプラクティス」,「第7章 物語りににおける指示表現」,「第8章 直示表現の再使用」,「第9章 結論」。

末尾に「参考文献」,「索引」を付す。なお、データと分析は科学研究費補助金(平成13・14年度若手研究(B)「日本語の指示表現に関する会話分析的研究」,「平成21-23年度基盤研究(C)「相互行為における指示に関する表現」)の助成を受けている。

(2018年1月5日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 268頁 6,400円+税 ISBN 978-4-89476-820-8)

小林千草著

『幕末期狂言台本の総合的研究 鷺流台本編』

本書は、著者が成城大学短期大学部日本語・日本文学コース在任中に研究資料・教材として集めた成城大学図書館蔵『狂言集』(14冊)を対象とした研究書であり、大蔵流・和泉流・鷺流の台本群に分けられたうちの鷺流台本編として刊行された。『大蔵流台本編』は平成28年10月に同出版社から刊行されている。

本書はⅠ部とⅡ部から構成される。「第Ⅰ部 幕末期狂言台本の書誌的研究と日本語学的・表現論的研究」には、「第一章 成城〈曲章四番〉本の性格について——名女川本との共通曲を中心に——」,「第二章 成城〈曲章三番〉本の性格と用語——「悪太郎」「鈍太郎」「花折新発知」「腰折」「泉」を通して——」,「第三章 成城〈曲章三番〉本の性格と用語——「伯養」「すいから」の場合——」,「第四章 成城〈曲章三番〉本の性格と用語——「釣針」「引くゝり」「河原太郎」「因幡堂」を通して——」,「第五章 成城〈曲章四番〉〈曲章三番〉所取の「墨塗」比較考」,「第六章 成城大学図書館蔵『狂言集』のうちの鷺流台本の資料的位置づけと言語状況」。「第Ⅱ部 幕末期鷺流狂言台本の翻刻」には、「成城〈曲章三番〉本」,「成城〈曲章四番〉本」。末尾に「あとがき」,「巻末索引」を付す。また、「あとがき」には論文発表の初出

も示される。

(2018年1月11日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 378頁 3,800円+税 ISBN 978-4-7924-1437-5)

糸井通浩著

『古代文学言語の研究』

本書は、古代文学言語に関わる著者の論考を一書にまとめたものである。語法と文法、文体、和歌言語の三編で構成される。

「前編 語法・文法研究」には、「〔一〕不可能の自覚——語りと副詞「え」の用法——」, 「〔二〕「き・けり」論」, 「〔三〕王朝女流日記の表現機構——その視点と過去・完了の助動詞——」, 「〔四〕『枕草子』の語法」, 「〔五〕文脈を形成する語法」, 「〔六〕人物提示の存在文と同格準体句——『宇治拾遺物語』を中心に——」。「中編 散文体と韻文体と」には、「〔一〕勅撰和歌集の詞書——「よめる」「よみ侍りける」の表現価値——」, 「〔二〕助動詞の複合「ならむ」「なるらむ」——散文体と韻文体と——」, 「〔三〕かな散文と和歌表現——発想・表現の位相——」。「後編 和歌言語の研究」には、「〔一〕『古今集』の文法——和歌の表現機構と構文論的考察——」, 「〔二〕『新古今集』の文法——和歌の構造と構文論——」, 「〔三〕和歌解釈と文法——語法と構文を中心に——」, 「〔四〕和歌の発想と修辭」, 「〔五〕〈うた〉の言説と解釈」。

末尾に「キーワード索引(用語・事項/作品・文献)」, 「初出一覧」, 「あとがき」を付す。和泉叢書491巻として刊行された。姉妹編として『「語り」言説の研究』(和泉叢書492巻)がある。

(2018年1月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 568頁 13,000円+税 ISBN 978-4-7576-0859-7)

糸井通浩著

『「語り」言説の研究』

本書では、虚構の出来事を作者以外の語り手が語る「語り」の言説部分における語法・文法について古代から近現代の物語を対象に論じる。前編では古典語の語りを取り上げ、「〔一〕物語の表現機構」, 「〔二〕「なりけり」構文と「語り」の展開」, 「〔三〕『源氏物語』の文体——「いかに書かれているか」の論——」, 「〔四〕夕顔巻(源氏物語)を読む」, 「〔五〕とぞ本にはべめる——語りテキストの表現機構——」, 「〔六〕『大鏡』——その語りの方——」から構成される。また、後編では現代語の語りを取り上げ、「〔一〕文章論的文体論」, 「〔二〕歴史的現在(法)と視点」, 「〔三〕小説の冒頭表現」, 「〔四〕「語り」と視点」, 「〔五〕小説の構造分析」, 「〔六〕マンガの表現——絵と詞——」から構成される。

末尾に「キーワード索引(用語・事項)」, 「初出一覧」, 「あとがき」を付す。和泉叢書492巻として刊行された。姉妹編として『古代文学言語の研究』(和泉叢書491巻)がある。

(2018年1月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 482頁 12,000円+税 ISBN 978-4-7576-0860-3)